

偕行現代考

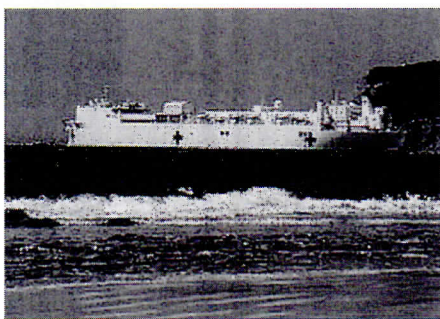
米海軍病院船の初来日

編纂委員会

病院船の概要

今年6月16日、米海軍の病院船「マーシー Mercy (慈悲)」が東京港に入港し、一般公開された。同船の来日は初めてで、その後、民生支援の訓練に東南アジアに向かった。

日本でも、東日本大震災で軍・民の艦艇による救援が行われ、後の検討会で「病院船を導入してはどうか」との話が持ち上がった。だが現在まで、具体化には至っていない。自然災害での対応のみならず、島嶼防衛においても



手前の連絡船と比較されたい (写真:米海軍提供)

傷病者の医療救護は、航空機・艦艇に抛らざるをえない。先進国の軍隊は、医療救護を受け持つ組織・人員・装備をセツトにし、その時に備えている。米海軍は、「艦隊病院 Fleet Hospital」と称し、医療設備・機材、医師・看護師を搭載した病院船を、何か所かに配備している。

車両に搭載した医療設備等を地上に設置するには、相応の地積を要するし、大量の水や電力が欠かせない。また、展開して設置し、運用を始めるまでに時間がかかる。

そこで登場したのが病院船。米海軍は、70年代に建造されたタンカー2隻を買い取り、病院船に改造した。1番艦「マーシー」は86年、2番艦「コンフォート」は87年に就役。「マーシー」は全長約272m、全幅は約32m、満載時の排水量は6万9千トン。これは、帝国海軍の「大和」に相当する。

医療設備は、診療室、手術室、病室といった道具立てが丸ごと船に納まっている。病床数の合計は1千床、集中治療室(ICU)もあり、臓器移植と心臓バイパス以外の手術ができるので、大学の総合病院並みと言われる。

大型ヘリの着艦も可能。但し、船速が最大速度が17・5ノットと遅いのと、船体が大きすぎて吃水が深いため、入港できる港が限られる。運行は、民間人と海軍軍人の混成チームが担当する。

病院船の長所と短所

来日した「マーシー」は、湾岸危機・戦争(90~91年)に出動したほか、13年のフィリピン台風被災に送り込まれた。僚艦の「コンフォート」は大西洋側に配備され、湾岸戦争に加えて94年にハイチ、03年にイラク戦争、05年はハリケーン「カトリーナ」に出動した実績を持つ。

しかし、病院船として就役してから30年余になるが、「本番」での出動回数は多くない。やたら本番が多いのも困るが、その少なさに病院船の泣き所がある。「いざという時、あれば助かる」が、「普段は活躍の場がない」。それでも「いざという時に備え、常に医療関係者や機材を、即応態勢、最高レベルにしておかなければならない」

病院船の場合、各科の医師と看護師(約1千3百名)、さらに検査技師や事務・医療補助などのスタッフも必要になる。それをどう確保・維持し、しかも経験を積ませておくか…。

人材確保はカネで解決できても、技量を向上させたり、船内関係部署の連携を図ったり、病院船を有効に活用するととなると、話は大きくなり、関係者官庁(防衛省、総務省、厚労省、国交省等)は一挙に広がる。

そこで米海軍は、平時から民生医療支援を病院船に活用している。今回「マーシー」の来日も、「パシフィック・

パートナーシップ」という任務航海の途中で行われた。

この「パシフィック・パートナーシップ」には、英国、日本、豪州から医療要員が送り込まれている。それは、太平洋諸国を対象として、米軍だけでなく、民間組織や関係各国と組んで実施する民生支援活動であり、06年にスタートした。そこでの「マーシー」は、医療施設が整っていない国の住民を対象に、診察や医療を行っている。

このように、平素から有効活用できる「名目と国民の支持」がなければ、常設の病院船を維持する資金を投入するわけにいかないのが、民主国家の泣きどころである…。

大東亜戦争時の日本は、民間籍の客船等を特設病院船に仕立てた。島嶼防衛が現実味を増し、南海トラフへの対応が急がれる今、海自の輸送艦に陸自の野外医セツトを搭載して対応する構想だけでいいのだろうか。6月29日、尖閣諸島周辺の接続水域を中国海軍の病院船が航行した。

「命は地球より重い」と言いながら、「時々必要になるが、普段はいらぬ」というカネの理論は、矛盾してないか。「マーシー」の訪日を機に、そんなことを考えた。

【資料】ウイキペディア「マーシー」

・雑誌「正論」9月号

(文責 喜田邦彦)